

《目次》

- [01] 巻頭言
- [02] 研究最前線
- [03] 第 5 回徳川宗賢賞受賞者決定
- [04] 第 15 回大会のお知らせ
- [05] 第 16 回大会予告
- [06] 博士論文情報

[01] 巻頭言

「方言研究」ならびに「あっさり方言」の逆襲？

田中ゆかり (社会言語科学会理事 / 日本大学文理学部)

「方言研究はつまらないよね、だって、調査に行っても先行研究で分かっていることを確認したり、使われなくなっていることを確認するだけだから」 大学院生だったときに、こんなふうに言われたことがある。もちろん、それがとても「方言」や「方言研究」を狭く狭く考えた意見であるという考えは、当時も今も変わらない。しかし、60年代から70年代の「共通語化」「言語地理学的研究」であるとか、70年代からの「社会的属性研究」であるとか、80年代からの「変異理論」「社会ネットワーク」の適用であるとかいった、大きな流れの中にあるときにくらべて、「方言」や「方言研究」の魅力減退は否定しにくいような気がする。「古い」「つまらない」「おきまりの」といったイメージの増殖だ。もうひとつ、《ある地域独特の濃厚な方言について、その方言を記述するトクベツな資格を持った人(「特殊な言語学的トレーニングを積んだ濃厚なネイティブ」)が、伝統芸能のように詳細に記述していくというイメージ画像》が、「方言」「方言研究」にある種の近寄りがない／近寄りたくない？イメージを与えている、とも思う。おまけに、「方言」が場面と必要に応じて切り替え可能な機能方言のひとつになって久しいし、「方言主流社会」対「共通語主流社会」という概念図が示されてからも時間が経つ。さらに、方言は「危機言語」のひとつでしかなくて、いきいきした研究対象としては、どうなんだろう？という、イメージである。

そのような中、『社会言語科学』7-1において「特集 方言」を担当した。自分のような者がおこがましいが、「方言研究」は、現在の社会言語科学において、基盤のひとつであり、今後もそうでありつづけるだろう、という思いが、今回の「特集」提案の大きな理由であった。実際には、言語地図という手法に関する日韓対照展望論文、社会的属性に注目が強烈にシフトしたばかりに置き去られていた「距離」と標準語使用の問題、方言から文法理論を組み立てようとする論考、方言間比較による幼児の言語発達、ポライトネス理論や談話研究を適用した論考、音響分析と言語地理学を融合させた論考、機能方言化した地域方言に「アクセサリー」という呼び名を与えたショート・ノート、方言使用と誇りに関するエッセイなど、強力な論考が並んだ。しかし、一方では、一般投稿数が非常に少なく、社会言語科学会会員のニーズとしては、「方言」や「方言研究」は、高くないことも実感させられ、これは、かなり残念であった。たとえば、日本語教育における方言の位置であると

か、各国における方言政策であるとか、わたしの考えられる範囲内でも、その他あれこれと、社会言語科学学会会員ならではの予想投稿論文があったのだが…。今回の特集が、会員になぁんだ、「方言」「方言研究」おもしろい！！やってみよう、として、伝わることを期待したい。きわめて個人的な関心としては、今回「特集」に掲載された論考を対象地域の観点からみると、「濃厚方言地域」限定の話題ばかりであることが、あれ？という感じでもあった。対象とされた地域をみると、奄美諸島1、岩手1、宮城1、新潟1、富山1、東北地方～北関東1、大阪と首都圏の対比1、首都圏・京都・鹿児島との対比1、大阪・広島・高知・福岡・名古屋・首都圏の対比1となる。たしかに、「濃厚方言研究」は楽しい。しかし、東京首都圏生育者の自分としては、気づきにくい「あっさり方言」にも、楽しさは潜んでいると思っている。いや、「あっさり方言」だからこそ、のおもしろさがあると思っている。「共通語基盤方言」、「濃厚方言との対比群」以外の楽しさが…。「あっさり方言」の逆襲。その「楽しさ」についての言及は、これから、自分の課題でもあるのだけれども。

## [02] 研究最前線

### メディア文化と社会心理

金相美（東京大学大学院情報学環）

私は1999年留学生として来日し、今年で7年目の日本生活に突入している。昨年12月からは、東京大学情報学環の助手として就任することになった。主に、パーソナル・メディア(携帯電話・インターネット)を通じた人間関係や社会生活に及ぼす影響・機能に関して、調査研究を通じた社会心理学的アプローチを中心に研究を進めている。3年前からは、研究のフィールドを日本から私の母国である韓国にまで広げ、日韓比較研究に専念しており、現在その成果を博士論文としてまとめる作業に追われている。

デジタル技術の発達により、メディア環境がすさまじい勢いで変化を遂げている。特に、コミュニケーション・ツールとして、また、社会的相互作用の場として機能しているインターネットの利用によって、私たちの世界は、意識的・無意識的に変化しつつある。CMC(Computer-Mediated-Communication)の研究は、1998年からインターネットと対人関係とのかわりについて様々な知見が提示されており、主に社会心理学的アプローチがよく用いられている。近年では、対人関係を Social Capital と称し、インターネットの利用と既知・未知の人間関係への影響に関する研究が増えつつある。たとえば、Koku(2001)、Wellman(2001)らは、新たな人間関係を創造するメディアとして一般的に考えられているインターネットが、実は、新たな人間関係を創造できるメディアであるというより、既存の人間関係を強化する機能を果たしていると主張する。一方、私たちの調査研究によれば、韓国の場合、コミュニティ・サイト(似た趣味・関心事を持っている人が集まるサイト)利用者の78%が、コミュニティ・サイトで会話を交わしている人と“オフ会”という場を借りて現実空間で会っていることが明らかになっている。そこにはそれまで実際一度も顔を合わせたことのない、情報縁と呼ばれる人も含まれている。つまり、これは、CMCのコミュニケーションが、実生活において、従来の人間関係の延長線上に自然なかたちで接合されつつあることを示唆する。これに対して、日本では、そうした動きが一部には存在するものの、十分な社会的認知が得られていないのが現状だ。

インターネットによる対人関係強化論、弱化論などの議論は、まるで卵と鶏の関係のように見える。インターネット利用がソーシャル・キャピタルを強くするのか、あるいは弱めるのかという問題は、ネットのコミュニケーションを観察するだけで解けるものではない。むしろ、ある特定の社会・文化における人間関係のあり方、信頼などの社会心理的土壌がCMCの姿として現れる。

私はかつて日本で在住している留学生のパーソナル・メディア利用と異文化適応・対人関係・日本語習得との関係について調査を行い、その結果をまとめた。彼らにとって携帯電話とは、主に母語話者とのコミュニケーション・メディアとして機能している傾向が見られ、相対的に日本人とのコミュニケーションを希薄化させている可能性が示唆された。さらに、この結果は異文化適応度が低い留学生においてより顕著であった。在日留学生の日本人友人の数は平均 0.9 人で一人にも満たず、留学生のネットワークは、携帯電話を持つことによって、日本人というより母語話者中心のものにより収斂してしまう可能性が示唆された。つまり、在日留学生の携帯電話利用は、交友関係を同言語話者と異言語話者へと「分層化」させるように機能していることが見出されたのである。

メディアの影響というのはあくまでも、それを受け入れた土壌の「風景」を拡大して映し出す媒介要因の一つに過ぎない。携帯電話やインターネットなどのパーソナル・メディアが、人々のネットワークを狭める／広げる、というのは実は本質的な問題ではない。その背後に存在するであろう特定の社会・文化状況にこそ注意すべきで、メディアは触媒としてその土壌に既に存在する状況を助長する要因となっているのである。

現在は日本と韓国におけるインターネット利用の対人関係・世論形成への影響について考察を進めている。日韓両国におけるインターネットの発展・進化の様相には、明確な相違点があり、その背景の原因として、日本と韓国の環境に内在する構造的な問題および人間関係・価値観といった社会心理的相違が存在すると考えられる。日韓におけるネット・コミュニケーション文化の形成と社会心理との相互関係メカニズムを概念化することが私の一つの研究目的である。

#### [03] 第 5 回徳川宗賢賞受賞者決定

このたび、第 5 回（2004 年度）徳川宗賢賞受賞論文として次の 2 論文が選考されました。

##### < 萌芽賞 >

「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け - 母語場面と接触場面の相違 - 」

伊集院郁子(東京大学大学院)

『社会言語科学』第 6 巻第 2 号 2004 年

「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス - 『遊び』としての対立行動に注目して - 」

大津友美(名古屋大学大学院)

『社会言語科学』第 6 巻第 2 号 2004 年

各受賞者にそれぞれ賞状と副賞 10 万円が贈られます。

選考理由は以下のとおりです。

「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け - 母語場面と接触場面の相違 - 」伊集院 郁子

日本語母語話者が初対面の会話において、どのようにスピーチスタイルを選択・確立していくかを、母語場面(母語話者との会話)と接触場面(日本語上級レベルの中国、台湾人学習者との会話)の対比において分析した研究である。分析の理論的枠組みを会話分析と Brown & Levinson のポライトネス理論に求めた。

本論文の優れた特徴は、1)同条件下における母語場面と接触場面の初対面会話を比較し

日本語母語話者の言語行動の特質を浮き彫りにしていること、2)スピーチレベルが時間軸の流れでどのように変化していくかをマクロな視点で分析していること、3)フォローアップインタビューを用いたデータを話者の場面意識、言語操作意識と照らし合わせながら読み解いていることであろう。

母語話者がもつ共通の規範意識や非母語話者へのステレオタイプ的な見方などから、母語場面と接触場面ではスピーチスタイルに相違があることを、データの数量的な分析と質的な分析を相補的に利用することにより明らかにしている。事例研究の枠組みにとどまらず、分析をまとめてスピーチスタイル選択のメカニズムとしてモデル化している点も高く評価された。データ収集も周到であり、方法論、分析ともに優れている。今後のスピーチスタイルの選択・確立に関する研究の新たな発展を予見させる優れた論文である。

「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス - 『遊び』としての対立行動に注目して - 」大津 友美

親しい友人同士の雑談の中で、些細なことで言い合ったりわざと反論したりしている状況を、「遊びとしての対立」場面として捉え、それが相互行為的協力により成立し維持される過程を分析している。Brown& Levinson がポジティブ・ポライトネスのひとつとしてあげている「冗談」が、会話の中でどのように実現され、親密な関係作りにもどのように貢献しているかを、ミクロな質的データ分析により解明することに成功している。

分析の枠組みとして、Bateson のフレームの概念を援用し、「これは遊びだ」というメタメッセージが、会話参加者の間で発せられると、それが 発話の繰り返し 韻律的操作 感動詞、スタイルスイッチング、笑い などのさまざまな言語・非言語的デバイスにより、相互協力的に維持され展開されていくありさまを、会話分析の手法を使って浮き彫りにしている。

日常の看過されがちな言語行為に焦点を当て、対人関係維持にはマイナスと考えられがちな「対立」を「遊び」として捉えたユニークな発想、「対立」が親しい友人間の対人関係の動機や相互作用の展開に寄与するプロセスを丁寧に読み解いていった実証性が高く評価された。議論は簡潔、明快で無駄がない。分析方法、分析枠組みに社会学、人類学、言語学の調和のとれた融合がみられ、萌芽賞にふさわしい論文であると判断された。

< 徳川宗賢賞を受賞して >  
伊集院 郁子

意義ある言語の研究とは何なのか、その答えが見出せずにただ試行錯誤を繰り返すばかりの私にとって、今回の受賞のお知らせは、大きな驚きであり戸惑いであると同時に、力強い励ましとなりました。私個人ができる研究には物理的にも能力的にも制約があり、その研究結果も非常に小規模な限られたものでしかありませんが、どんな研究スタイルでも、真摯に向き合って得られた結果であればそこには何らかの価値があるのだ、という励ましをいただいたように思います。

もちろん現在でも、意義ある言語研究とは何かという問いに対する答えは出ていませんが、いつの日か真に「社会の福利に資する言語研究」ができるよう、今後も研鑽を積んでいきたいと思えます。

論文の作成にあたり、辛抱強くご指導ご助言をくださった先生方をはじめ、いつも様々な形で研究活動を支えてくださる皆様に、この場をお借りして改めてお礼申し上げます。

大津 友美

私にとって、親しい友達と会っておしゃべりしているときに、一番楽しい時間です。「どうして友達とおしゃべりはこんなに心地よくて楽しいのだろう。」そんな個人的な疑問が私の研究の出発点でした。この論文の発表後も、引き続き友人同士の会話に見られる現象に注目し、分析を続けておりましたところに、このような名誉ある賞をいただき、たいへんな喜びを感じています。ありがとうございました。

この論文を私一人の力で仕上げることは到底できませんでした。尾崎明人先生のご指導や会話資料を提供して下さった方々のご協力のおかげだと思っております。また論文作成中は編集委員長の日比谷潤子先生にたいへんお世話になり、査読委員の先生方からも貴重なご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。この論文は友人同士の会話に見られる現象のほんの一部を扱ったものにすぎず、まだまだ研究しなければならない現象はたくさんあります。これからも多くの勉強が必要だと感じておりますので、今回の受賞を励みに、これからもがんばっていきたいと思います。

\*なお 2004 年度より徳川宗賢賞は「優秀賞」と「萌芽賞」の 2 賞になりました。賞の趣旨、授賞理由などの詳細は、学会ホームページ <http://www.jass.ne.jp> をご覧ください。

#### [04] 第 15 回大会のお知らせ

社会言語科学会の第 15 回大会(早稲田大学共催)は、以下の予定で行われます。

【日時】 2005 年 3 月 19 日(土)、20 日(日)

【場所】 早稲田大学(〒169-8050 新宿区西早稲田 1-6-1)

<http://www.waseda.jp/jp/campus/index.html>

交通: 早稲田駅(東西線)または早稲田駅(都電)から徒歩 5 分

早大正門(高田馬場駅発バス、渋谷駅発バス)から徒歩 3 分

【申込】 今回より、事前参加申し込みを受付いたします。事前参加申し込みの受付は 3 月 5 日(土)までですので、ご注意ください。できるだけ事前参加をご利用いただきますようお願いいたします。ご希望の方は、以下のページからお申し込みください。

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/jass/15/entry.html>

当日会場での受付もいたしません(当日料金となります)。

プログラムの詳細は、大会委員会のホームページをご覧ください。

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/jass/15/>

#### < 社会言語科学の未来を作る会 第 6 回集会のお知らせ >

日時: 2005 年 3 月 19 日(土) 20:00(懇親会終了後) ~

場所: 早稲田大学周辺(20:00 に懇親会場受付前集合)

主催: 社会言語科学会企画委員会

#### [05] 第 16 回大会予告

大会の予告、研究発表・ワークショップの募集については、以下のホームページをご覧ください。 [http://www.jass.ne.jp/taikai/JASS16\\_cfp.htm](http://www.jass.ne.jp/taikai/JASS16_cfp.htm)

[06] 博士論文情報  
(2004年7月22日～2005年1月31日受付分)

**『ジェンダー化された「日本語」 形成過程、及びその象徴的意味と政治的機能』**

鷲 留美

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 博士(文学) 2003年3月

**『言語変種の形成過程に関する社会言語学的研究 ニュータウンを事例にして - 』**

朝日 祥之 yasahi@kokken.go.jp

大阪大学大学院文学研究科 博士(文学) 2004年3月

本稿は、移住者社会で生まれた言語変種の形成過程を、神戸市に所在する西神ニュータウンをフィールドとした調査から、解明しようとしたものである。移住者とニュータウンで生まれ育った世代を対象にした認知方言学的調査と言語使用調査を実施した。それぞれの調査の分析結果から、ニュータウンにおける言語変種の形成過程のモデル化を試みた。

**『翻訳における話法 異化・同化ストラテジーの観点から 』**

伊原 紀子 iharai@fa2.so-net.ne.jp

神戸大学大学院総合人間科学研究科 博士(学術) 2004年3月

日・英の小説翻訳における様々な現象を話法表現という軸で捉え、ディスコース・モダリティの標識などの言語的特質が、各言語社会の文化や認知習慣をどのように反映しているかを考察する。話法表現の違いは、言語の非指示的機能の差異に関わり、小説の表現効果を大きく左右することを明らかにした上で、異化・同化の観点から翻訳の方法を論じる。

**『Deontic Epistemic の普遍性と相対性 モダリティの日英対照研究 』**

黒滝 真理子 〒101-8375 千代田区三崎町2-3-1 日本大学法学部 黒滝研究室  
お茶の水女子大学 博士(人文科学) 2004年3月

本研究は、deontic(義務的) modality と epistemic(認識的) modality との関連に関する問題の所在を日英語の事例から整理・再考し、伝統的な主観表現論における問題の在りかを提示しつつ認知意味論的アプローチの有効性を証した。

**『成員カテゴリー化の観点から見た社会的相互行為の諸相 多人数会話における話者交替を中心に 』**

森本 郁代 ikuyom@nict.go.jp

大阪大学大学院言語文化研究科 博士(言語文化学) 2004年6月

本研究は、多人数会話における話者交替に焦点を当て、話者交替システムという会話の不変的(invariant)な側面と参加者がそのつど「何者として」参加しているかという個別的側面とが連動し話者交替が達成されていく過程を明らかにした。さらに、会話という社会的相互行為が組織化される仕組みを不変的側面と個別的側面の両方から記述・分析する枠組みの提案を試みた。

(博士論文情報次頁に続く)

『**発言内容の欺瞞性認知を規定する諸要因 会話の協調原理違反に基づく分析を中心に**

』

村井潤一郎 murai@hum.u-bunkyo.ac.jp

東京大学 博士（教育学） 2004年10月

本論文では、Grice(1975)の「会話の協調原理」をベースにした McCornack(1992)の「情報操作理論」をもとに、発言内容の欺瞞性認知を規定する諸要因について実証的検討を加えた .6 つの実験、2 つの調査を通し、先行研究の各種問題点を克服した上で情報操作理論を再検討し、下位公準を設定することで理論の精緻化を行った。

発行：社会言語科学会事務局(\*)

E-mail: mem@jass.ne.jp

URL: <http://www.jass.ne.jp>

(\*) 現在移転中です。ご不便をおかけして申しわけございませんが、ご連絡は電子メールでお願いいたします。